

鞠智城の歴史的位置

佐藤 信

1. はじめに

古代山城鞠智城がもつ歴史的意義の多面的解明をめざして、熊本県がこれまでに開催してきたシンポジウムのいくつかにおいて、私は報告の機会を与えられたりパネルディスカッションに参加させていただき、鞠智城の歴史的把握に関する多様な視角からの展望を述べてきた。その中には、文章化して「古代史からみた鞠智城」(笹山晴生監修『古代山城鞠智城を考える 2009年東京シンポジウムの記録』山川出版社、2010年11月)、「古代鞠智城と東アジア」(『古代山城鞠智城を考えるⅡ 成果報告 東京シンポジウム2010』熊本県教育委員会)という形で公表したものもある。本稿は、それらを取りまとめ、鞠智城の歴史的位置を改めて総体的に明らかにする方向での考察を進めたいと考える。

2. 白村江の敗戦と鞠智城

隋に代わって618年に中国を統一し、律令にもとづく中央集権制のうえに強大な帝国を築いた唐は、高句麗への攻撃をはじめて朝鮮半島に進出する動きを見せる。それを受け、東アジアの諸国は、にわかに動乱の時代を迎えた。高句麗・百済・新羅・耽羅そして倭などの諸国は、それぞれ国家存亡の危機を迎えて、国内における国家的集中を図ることになった。高句麗では重臣の泉蓋蘇文がクーデターを起こして権力を掌握し、百済では義慈王が力を振るい、新羅は金春秋や金庾信らが女王を支え、倭では乙巳の変(645年)で蘇我氏本宗家に代わって孝徳天皇や中大兄皇子たちの「革新」政権ができた⁽¹⁾。朝鮮半島・日本列島の諸国は、国内では中央集権化への動きを進めつつ、対外的には熾烈な外交戦を展開した。かつて隋が高句麗遠征に失敗して瓦解していったことを知る唐は、今度は新羅と同盟して高句麗・百済を挾撃する戦いを始めた。内部的な不統一もあって、ついに百済は660年7月に王都扶余が陥落する。百済の義慈王と皇太子余隆等の王族や貴族たちは唐の洛陽(東都)に連行され、唐の高宗皇帝から恩免された。同様に高句麗も、泉蓋蘇文没後に息子達の分裂があり、668年9月に平壤城が落城して滅んだ。

百済の地では、鬼室福信や余自進ら百済の遺臣たちが、義慈王を失った後も根強い抵抗戦を展開して、地域的にお大きな力を保っていた。この百済復興勢力は、660年10月倭に援軍を要請し、倭に滞在していた百済王子余豐璋の送還を願った。齊明天皇・中大兄皇子らを中心とする倭の王権は、ついにその要請に応え、大規模な救援軍を送るとともに、百済王子余豐璋を送り届けたこととした。朝鮮半島における友好的存在である百済の国家的存続が、倭にとって有利と判断したものと思われる。ここに、百済復興勢力・倭対唐・新羅という国際戦争の枠組みができることとなった。

倭の王権は、百済救援の大軍を派遣すると同時に、齊明天皇や皇太子にあたる中大兄皇子をはじめ大海人皇子・中臣鎌足らの王権中枢メンバーがこそって北九州に移動して戦いを近くで指導した。その動きは、660年(齊明6)12月に齊明天皇は難波宮(大阪府大阪市)に移り、翌661年正月には難波津から船を發して瀬戸内海を西に移動し(「御船西征」)、吉備の大伯海(岡山県邑久郡)や伊予の熟田津(愛媛県松山市)で地方豪族たちの軍事動員を進めた上、3月には博多湾岸の那大津(福岡市博多)に着いて磐瀬行宮(仮宮、長津宮)を営んでいる。さらに5月には博多湾沿いから筑紫平野の奥に移って、筑後川沿いの朝倉橋広庭宮(福岡県朝倉市)に遷宮する⁽²⁾。この九州の宮には齊明天皇をはじめ中大兄皇子・大海人皇子や藤原鎌足など、政権の中枢がそろって移っており、百済救援軍にかけた倭王権の必死な姿勢がうかがえる。661年7月に

齊明天皇が朝倉宮において病氣で亡くなると、皇太子中大兄皇子が喪服のまま称制して、前線に近い長津宮で「水表之軍政」を行った。こうして 661 年から 663 年にかけて倭の大軍が旧百濟の地に派遣されたが、百濟復興勢力の中では、王として迎えられた余豐璋が有力な軍将の鬼室福信を斬ってしまうなど、不統一が展開する。663 年 8 月に、錦江河口部の白村江において唐の水軍と倭・百濟の水軍との戦いが展開し、瞬く間に唐軍が完勝する。この敗北によって百濟復興の道は途絶し、余豐璋は船で高句麗をさして逃げ、百濟復興勢力は力を失い、残った百濟貴族や民衆のなかには日本列島に渡るものも多かった。

白村江の戦いでは、唐軍は統制のとれた律令制にもとづく軍団であったのに対して、倭軍の実態は各地の地方豪族がそれぞれ率いる「国造軍」の集合体であったといえる⁽³⁾。国造は、後の律令国家では地方官の郡司に任命されるクラスの、日本列島各地の伝統的な地方豪族であり、彼らが氏族的結合下の一族や支配下の民衆・奴婢を動員したのが「国造軍」の実態であった。倭・百濟連合水軍の作戦は「我等先を争はば、彼自づからに退くべし」(『日本書紀』同月戊申条) というような稚拙なものであり、律令軍制により指揮命令系統が整然と統率されていた唐の大水軍との優劣は、はじめから明らかであったと思われる。

ところで、倭軍を構成した地方豪族軍は、列島のかなり広範囲に及ぶ地域の地方豪族たちからなっていたことが、捕虜として唐に連れ去られ、のちに苦労の末に帰国を果たした人々の記事から知られる。その記事は、次のようなものである。

①『日本書紀』天武 13 年 (684) 12 月癸未条

大唐の学生土師宿禰甥・白猪史宝然、及び百濟の役の時に大唐に没められたる者猪使連子首・筑紫三宅連得許、新羅に伝ひて至り。則ち新羅、大那末金物儒を遣して、甥等を筑紫に送る。

②『日本書紀』持統 4 年 (690) 9 月丁酉条・10 月乙丑条

大唐の学問僧智宗・義徳・淨願、軍丁筑紫国の上陽咩郡の大伴部博麻、新羅の送使大那末金高訓等に従ひて、筑紫に還至れり。

軍丁筑紫国の上陽咩郡の人大伴部博麻に詔して曰はく、「天豐財重日足姫天皇(齊明)の七年(661)に、百濟を救ふ役に、汝、唐の軍の為に虜にせられたり。天命開別天皇(天智)三年(664)に泊びて、土師連富杼・氷連老・筑紫君薩夜麻・弓削連元宝の兒、四人、唐人の計る所を奏聞さむと思欲へども、衣糧無きに縁りて、達くこと能はざることを憂ふ。是に、博麻、土師富杼等に謂りて曰はく、『我、汝と共に、本朝に還向かむとすれども、衣糧無きに縁りて、俱に去くこと能はず。願ふ、我が身を賣りて、衣食に充てよ』といふ。富杼等、博麻が計の依に、天朝に通くこと得たり。汝、獨他界に淹滯すること、今に卅年なり。朕、厥の朝を尊び國を愛ひて、己を賣りて忠を顯すことを嘉ぶ。故に務大肆、並て絶五匹・綿一十屯・布三十端・稻一千束・水田四町賜ふ。其の水田は曾孫に及至せ。三族の課役を免して、其の功を顯さむ」とのたまる。

③『日本書紀』持統 10 年 (696) 4 月戊戌条

追大式を以て、伊予国の風速郡の人物部薬と、肥後国の皮石郡の人壬生諸石とに授けたまふ。並て人ごとに絶四匹・絲十絣・布廿端・鍬廿口・稻一千束・水田四町賜ふ。戸の調役復す。以て久しく唐の地に苦ぶることを慰ひたまふとなり。

④『続日本紀』慶雲 4 年 (707) 5 月癸亥条

讃岐国那賀郡錦部刀良、陸奥国信太郡生王五百足、筑後国山門郡許勢部形見等に、各衣一襲と塩・穀とを賜ふ。初め百濟を救ひしき、官軍利あらず。刀良ら、唐の兵の虜にせられ、没して官戸と作り、冊余年を歴て免されぬ。刀良、是に至りて我が使粟田朝臣真人らに遇ひて、隨ひて帰朝す。その勤苦を憐みて、此の賜有り。

これらの記事によれば、九州や中国・四国地方だけでなく、陸奥国の勢力まで動員されていたことが知ら

れる。多くの地方豪族が白村江の敗戦を体験して国家的な危機を実感したことは、この後の中央集権的な律令国家形成に向けての動きを促進する上で大いにプラスとなったことであろう。

ところで③の記事からは、鞠智城が築かれることになる肥後国内の皮石郡の地方豪族も白村江の戦いに参戦していたことがうかがえる。肥後の地も、この東アジアの国際戦争と密接に関わっていたものといえる。

663年8月の白村江の敗戦を受けて、唐・新羅連合軍がすぐにでも倭に攻め込んでくる可能性があるということで、倭では緊急の防衛体制の整備に努めることとなった。『日本書紀』によれば、天智3年(664)に、対馬島・壹岐島や筑紫国等に防人(さきもり)と烽(とぶひ)を置くとともに、合わせて後の大宰府の地を守るため、筑紫に大きな堤を築いて貯水する「水城」を築いて緊急に備えている。また天智4年(665)8月には、亡命してきた百濟貴族たちの力により、長門国(「長門城」)や筑紫国の大野城・基肄城(櫟城)などの古代朝鮮式山城を築城している。水城や大野城・基肄城は、やはり後の大宰府都府楼の地を守る機能をもった。最近は大宰府東南方を守る阿志岐山城もみつかり、九州防衛の危機感の強さがさらに裏付けられた。この7世紀後期には、半島の進んだ築城技術を用いて、それまでにない石垣や版築などの構造をもつ古代朝鮮式山城が、九州・瀬戸内から近畿地方にかけて営まれている。

⑤『日本書紀』天智3年(664)是歳条

是歳、対馬島・壹岐島・筑紫国等に、防と烽とを置く。又筑紫に、大堤を築きて水を貯へしむ。名けて水城と曰ふ。

⑥『日本書紀』天智4年(665)8月条

達率答林春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び櫟、二城を築かしむ。

築城技術としては、たとえば大野城の「百間石垣」と呼ばれる山腹を取り囲む高く長い石垣のライン、谷部の石垣に開く水門や城門の構造などに、半島伝来の進んだ技術がうかがえよう。また水城は、幅60m・深さ4mの水濠と大堤とからなり、東門・西門の2箇所しか道が通らない構造となっており、大軍を押しとどめられる機能を保っている。大堤の版築に際しては粗朶敷工法が採られ、掘立柱の埋め殺し工法もみられるなど、半島系の技術ということができよう。東の大野城と西の春日丘陵とを結んで平地の地形をせき止める大堤の下部に設けられた、南の上流側から博多湾側の水濠へと導水する地下暗渠の木樋群は、精密な設計と施工が為されており、技術的なレベルの高さをうかがうことができる。

ところで、鞠智城の造営については、『日本書紀』が百濟からの亡命貴族である達率の憶礼福留・四比福夫らによって天智4年(665)8月に大野城・基肄城が築かれたことを記しているよう、築城の記録が残っていない。しかし、『続日本紀』文武2年(698)5月に、上記の大野城・基肄城とともに鞠智城を合わせた三城の修繕が命じられている。

⑦『続日本紀』文武2年(698)5月甲申条

大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕治せしむ。

663年の白村江の敗戦による危機感によって大野城・基肄城が築かれたように、鞠智城も同時期に築かれたからこそ、修繕も同時期に必要となったとみるのが、自然であろう。そしてその修繕は、中央政府から大宰府に対して命じられており、大宰府が大野城・基肄城とともに鞠智城をも直接管轄していたことが知られる。

実は、鞠智城の修繕の翌文武3年(699)12月にも、大宰府に対して三野城・稻積城の修繕が命じられている。これらの城も、対外防備のための古代朝鮮式山城であろう。

⑧『続日本紀』文武3年(699)12月甲申条

大宰府をして三野・稻積の二城を修らしむ。

このうち三野城については、筑前国那珂郡海部郷の美野駅付近に推定する吉田東伍『大日本地名辞書』の説がある。稻積城については、やはり吉田東伍『大日本地名辞書』が筑前国志麻郡志麻郷（糸島郡志摩町）稻留付近に推定しており、青木和夫説は、同地の「火山」（標高 244 m）に推定している。三野城と稻積城を南方の隼人対策の薩摩側の山城とみる説もあるが、有力な説といえよう。このうち稻積城が置かれた筑前国志麻郡には、のちに述べるように、大宝 2 年（702）筑前国嶋郡川辺里戸籍に、肥君猪手という肥後の地方豪族系の人物が嶋（志麻）郡大領として存在していた。海峡に面した対外的な玄関の地に営まれた対外防備のための古代朝鮮式山城を抱える筑前国志麻郡の地にも、肥後の有力地方豪族肥君の一族が郡司として存在していたのである。

防衛の要地に築かれた古代朝鮮式山城は、同時に天智 3 年（664）に置かれた烽の連絡網とも結びつく防衛施設であった。烽は、外敵の襲来という危急を伝えるための高速情報伝達手段であり、同時に大宰府や宮都までつづく連絡網の繋がりが機能しなければ無意味となるものであった⁽⁴⁾。

律令の烽の制度では、兵部省の長官「卿」の職掌に「烽火の事」（職員令 24 兵部省条）とあるように、烽は軍事制度として位置づけられ、所在する地方では大宰府の長官「帥」の職掌に「烽候」（職員令 69 大宰府条）、諸国の国司の長官「守」の職掌に「烽候」（職員令 70 大国条）とあるように大宰帥・国司が管轄した。軍防令に規定するように、烽は 40 里ごとに置かれ、昼夜警戒して異常のある時は昼はのろし、夜は火を挙げて次の烽に連絡を伝える。外敵の数などの様子に応じて、のろしの上げ方を変える。国司はしかるべき有力者を烽長に任じ、配下の烽子とともに烽を維持させることになっている。

⑨軍防令 66 置烽条

凡そ烽置くことは、皆相ひ去らむこと四十里。若し山岡隔り絶えて、便に遂ひて安置すべきこと有らば、但し相ひ照し見ること得しめよ。必ず要すしも四十里を限らず。

⑩軍防令 67 烽昼夜条

凡そ烽は、昼夜時を分ちて候ひ望め。若し烽放つべくは、昼は烟を放ち、夜は火を放つ。其れ烟一刻尽し、火一炬尽すまでに、前烽応へずは、即ち脚力を差して、往りて前烽に告げよ。候失へる所由を問ひ知りて、速かに所在の官司に申せ。

⑪軍防令 68 有賊入境条

凡そ賊有りて境に入らむ、烽放つべくは、其れ賊衆の多少、烽の数の節級は、並に別式に依れ。

⑫軍防令 69 烽長条

凡そ烽には長二人置け。三烽以下を検校せよ。唯し境越ゆること得ざらむ。国司、所部の人の家口重大にして、検校に堪へたらむ者を簡びて充てよ。若し無くは、通ひて散位、勲位を用ゐよ。分番して上下せよ。三年に一たび替へよ。交替の日に、新人を教へて通ひて解らしめよ。然うして後に相ひ代れ。其の烽修理すべくは、皆烽子を役せよ。公事に非ずよりは、輒く守る所を離ること得じ。

⑬軍防令 70 配烽子条

凡そ烽には、各烽子四人配てよ。若し丁無からむ処は、通ひて次丁を取れ。近きを以て遠きに及べ。均分して番に配てよ。次を以て上下せよ。

対外的危機に対処して烽をはじめて設置した『日本書紀』天智 3 年（664）是歳条の記事には、烽を設ける地を「対馬島・壹岐島・筑紫国等」としているが、実際には九州の各地に烽の連絡網が設定された様相を、『肥前国風土記』・『豊後国風土記』の烽の記事に見ることができる。

『肥前国風土記』には、7 郡に計 20 箇所の烽が記されている。養父郡・神埼郡・小城郡に 1 所、松浦郡に 8 所、藤津郡に 1 所、彼杵郡に 3 所、高来郡に 5 所という分布である。このうち松浦郡には、「褶振峰〔郡の東に在り。烽家。名を褶振烽と曰ふ。〕」とあり、また「值嘉郷〔郡の西南の海中に在り。烽家三所有り。〕」とあるよう

に、烽には烽長や烽子が勤める「烽家」という施設が置かれたことが知られる。肥前国の日本海に面した地域だけでなく、有明海側にも烽の連絡網が組まれていることに注意したい。また『豊後国風土記』にも、4郡に計5箇所の烽が記されており、大野郡に1所、海部郡に2所、大分郡に1所、速見郡に1所という分布である。これらの烽も、関門海峡より東南の内海側に配されていることに留意したい。

これらの烽が実際に機能した様子は、天平12年（740）に西海道で起きた大宰少弌藤原広嗣の乱の記録に見ることができる。

⑭『続日本紀』天平12年（740）9月戊申条

間諜申して云はく、「広嗣は遠珂の郡家に軍營を造り、兵弩を儲く。而して烽火を挙げて国内の兵を徵り發せり」とまうす。

⑮『続日本紀』天平12年（740）10月壬戌条

逆賊広嗣謀りて云はく、「三道より往かむ。即ち広嗣自ら大隅・薩摩・筑前・豊後等の国の軍合せて五千人を率ゐて、鞍手道より往かむ。綱手は筑後・肥前等の国の軍合せて五千許人を率ゐて、豊後国より往け。多胡古麻呂、〔率ゐる軍の数を知らず〕田河道より往け。」といふ。

ここで藤原広嗣は、烽火を挙げて諸国の兵を徵發している。大宰府の烽火による徵兵は外敵に対応するという原則であるから、諸国ではすぐに最大限の軍団兵士の動員が行われたものと思われる。広嗣側に動員された諸国の軍勢としては、『続日本紀』の記事により藤原広嗣が率いた大隅・薩摩・筑前・豊後等の国の軍5000人、藤原綱手が率いた筑後・肥前等の軍5000許人、そして多胡古麻呂が率いた数未詳の軍が知られるが、肥後国軍は明記されていない。広嗣軍のうち多胡古麻呂の軍が肥後の軍団ならば、4軍団の定員4000人（弘仁4年〔813〕まで）であったことになろう。肥後国軍団については、平城宮跡から出土した木簡の中に、題籤軸の小口に細字で墨書した「肥後国第三益城軍団養老七年兵士歴名帳」という木簡があり、養老7年（723）に肥後国第3の益城郡に置かれた「益城軍団」に属する軍団兵士の名前を書き上げた紙の帳簿が公文書として宮都に送られていたことが知られている。

大宰府管下の西海道の軍団は、防人とは別に防衛のための基盤となる軍事力であり、延暦11年（792）6月に諸国の律令軍団制が停廢された時も、辺境の陸奥・出羽・佐渡と大宰府管内諸国とは停廢対象からは除外されて、軍団制が存続している。延暦14年（795）には壱岐・対馬以外の防人が停止され、さらに延暦23年（804）には壱岐の防人も停止されているから、対外的防備も、次第に西海道の軍団に依存することになったとみられる。この背景には、東北における対蝦夷戦争での東国諸国の軍事的負担を軽減するために、北部九州への東国防人の派遣を停止したものと考えられる。ただし、延暦18年（799）4月13日太政官符（『類聚三才格』）によれば「内外無事で防護の恐れなく、空しく民力を費やす烽燧の設は不要」として全国的に烽候が停廢されたものの、大宰府管内に限ってのみは旧のまま設置が続けられていることは、やはり対外防衛関係において西海道が担った特別な重要性が指摘できよう。

ところで、白村江の敗戦の結果として、唐・新羅連合軍が日本列島に侵攻してくるようなことにはならなかった。朝鮮半島においては、白村江の戦いの後、そして高句麗の滅亡後、唐と新羅の間で、百済や高句麗の故地の支配権をめぐって、熾烈な争いが水面下や時に表面化しつつ展開していったからである。唐は、はじめ百済の故地に熊津都督府を置き、もと百済皇太子の扶余隆を都督に任じて、新羅王とも仲良くするようには会盟させたが、新羅は唐に臣従の姿勢を見せながらも次第に圧力を加えて百済の故地を自らの支配下に組み込んでいった。高句麗の故地についても同様で、新羅は、高句麗の遺臣・遺民を支援しながら唐の勢力を上手に排除して、676年には朝鮮半島における支配権を確立していった。こうして、新羅によって朝鮮半島が統一されるのである。さらに698年には渤海が建国され、唐の北東アジアへの軍事的制圧政策は変更を余儀なくされたのであった。

こうした白村江の戦いそして高句麗滅亡後の唐と新羅の対抗状況は、白村江で敗北した倭にとっては幸いとなる歴史的環境となった。白村江の戦いの翌 664 年 5 月には百濟を攻略した唐の將軍劉仁願の使として郭務悰らが倭に表函を持って到来するが、それ以後の唐からの使節も合わせて、決して軍事的な侵攻を意図する使節ではなかった。日本からは、701 年（大宝元）に久しぶりに遣唐使を任するまで、7 世紀の最後の 30 年程は遣唐使を派遣することではなく、もっぱら新羅との外交交流を通して国際情勢を摂取したのであった。

新羅からは、高句麗滅亡の年の 668 年 9 月に使が倭に到来し、倭側の中臣鎌足が金庾信に、天智天皇が新羅王に船をそれぞれプレゼントするという友好的な関係が築かれる。新羅としては、高句麗滅亡後の朝鮮半島情勢を見据え、唐の勢力の駆逐をめざして背後の倭と結んでおくことがめざされたのであろう。

白村江の戦いに敗北し、唐・新羅連合軍の侵攻に備えようとしていた倭にとっては、唐将や新羅からの友好的な使節の到来は意外なものではなかったのではないか。戦闘に大敗したにもかかわらず、侵攻の危機は急速に去り、そればかりか勝者であるはずの唐将や新羅が友好的態度を示してきたのである。あたかも結果としては戦いに敗北していなかったかのような状況になったといえよう。それは日本列島の地政上の位置がしからしめたものではなかったが、貴族たちの意識の上では、白村江の敗戦を敗北として受け止めるよりも、むしろ対外的な優越感を強める方向に向かっていった。こうして、実態とは必ずしもそぐわない「大国意識」が醸成され、やがて律令国家の「小中華意識」へとつながっていったと思われる。

3. 鞠智城と東アジア、隼人世界

鞠智城の立地を考えるとき、九州でも大宰府の南方に奥まって位置しており、海岸線からも内陸に入っていることから、前線ではなく後方支援の基地であるとか、南方の隼人勢力に対峙する城としての性格を指摘する見方もみられる。しかし、有明海は国際関係と非常に密接な関係にあり、鞠智城の立地は、菊池川流域の生産地帯を見渡す地であると同時に、筑紫から薩摩に向かう古代西海道の南北交通路の路線に近く、有明海側から東海岸の豊後・日向に向かう東西交通路も押さえる立地ということができるだろう。

有明海と国際関係の結びつきとしては、6 世紀前半頃の筑紫国造磐井の戦いで知られる筑紫国（のち筑前・筑後）・火国（のち肥前・肥後）・豊国（のち豊前・豊後）を勢力基盤とした筑紫君磐井の本拠地が、肥後すぐ北に隣接する筑後にあり、九州の有明海側北部の福岡県八女市の八女古墳群岩戸山古墳の周辺と考えられることが思い起こされる。『日本書紀』（継体 21 年〔527〕6 月条）によれば、筑紫君磐井は、新羅と密接に通交したほか、高句麗・百濟・新羅・加耶などの諸国の外交使節を自らのもとに招致して畿内の大王のもとには行かせなかったという。筑後の磐井が朝鮮半島諸国との国際関係を展開した背景には、北九州の博多湾沿いの、たとえば磐井の戦いの後に磐井の息子の葛子が贖罪のため大王に提出した博多湾側の糟屋屯倉の地などを拠点とした交流が当然考えられるが、それとともに有明海側の海路を使った対外交流のコースも、十分に考えられよう。

『筑後国風土記』逸文によって磐井が生前に営んだ墳墓とみられる岩戸山古墳や八女古墳群を中心に、5 世紀後半から 6 世紀前半にかけてみられる石人・石馬の古墳文化圏は、そのまま磐井の勢力圏と対応するものとされている。この石人・石馬の材料とされたのが阿蘇凝灰岩であり、火国（肥前・肥後）の阿蘇の石も磐井の勢力圏であった⁽⁵⁾。

火国の古墳文化の展開を考える時、重要なのは、江田船山古墳（熊本県和水町）出土鉄刀銘であろう。ワカタケル大王（倭王武・雄略天皇）と火国（肥後）の地方豪族との関係を象徴する金石文といえる。大王に「奉事」する文官の「典曹人」として无利豆という豪族が、大刀を作らせてその刀背部に銘文を銀象嵌で刻ませたというものである。无利豆にとって「其の統ぶる所を失はず」という目的の為であり、在地における自

らの統治権を維持するために大王への奉仕関係を利用する地方豪族の立場と、地方豪族を取り込みつつ日本列島の東西に勢力を拡大しつつある大王の立場の重層を読み取れよう。有利弓が「作刀者」の倭人技術者や「書者張安」という文筆を担う渡来人を配下に抱えていることも、注目される。一方、この大刀とともに出土した副葬品の金銅製の冠・耳飾り・履や馬具など優秀な金属製品は、朝鮮半島の百濟系の品といわれ、肥後の地方豪族による対外交流のあり方を示す遺物といえるだろう。

⑯熊本県江田船山古墳（熊本県和水町）出土鉄刀銘（東京国立博物館）

台天下獲□□□鹵大王世、奉事典曹人名有利弓、八月中、用大鉄釜、并四尺廷刀、八十練□十振、三寸上好□刀。服此刀者、長壽、子孫洋々、得□恩也。不失其所統。作刀者名伊太□、書者張安也

肥後の地方豪族である肥君たちが、対外関係の中で活躍した様子も、ここで見ておきたい。その代表格は、火葦北国造刑部鞍部阿利斯登とその子の日羅の2人である。6世紀初めに倭の王権で力をふるった大伴氏によって、半島南部の加耶の地における倭の権益の維持をめざして半島に派遣されたのが火葦北国造刑部鞍部阿利斯登であった。そしてその阿利斯登の子が日羅（～583）である。日羅は、百濟王に仕えて優れた才により達率（百濟の16等官位の第2）にまでのばった、倭人系の百濟官人ともいるべき人物である。敏達天皇の時代に、半島政策への諮詢を求める倭の大王の要請に従い、百濟から倭に渡った。吉備児島屯倉、難波館を経て河内国阿斗桑市の館に入り、諮詢に答えるが、しばらくして百濟の使者に暗殺されてしまう。日羅は、一度蘇って暗殺者は百濟使で新羅側ではないことを伝えたといい、百濟・新羅・倭の三国の国際関係をめぐって活躍した人物といえよう。暗殺した百濟使の処分は日羅の一族にゆだねられ、一族はのちに日羅を肥後国葦北に移葬したという。6世紀前半は、朝鮮半島南部の加耶の地をめぐり、北方から高句麗進出の圧力を受けた百濟や新羅が勢力を伸ばしてきた時代で、倭は加耶の存続を図る方向で関与しつづけた時期であった。結局、512年に百濟が加耶の西部を勢力下におさめ、のち562年には新羅が残る加耶をすべて併合することになった。こうした激動の時期に、日羅は肥後国火葦北国造である刑部鞍部氏の出身者として倭人系の百濟官人として朝鮮半島において活躍したのであった。

⑰『日本書紀』敏達12年（583）7月朔条

詔して曰はく、「我が先考天皇（欽明）の世に属りて、新羅、内官家を滅せり。…先考天皇、任那を復てむことを謀りたまへり。果さずして崩りまして、其の志を成さずなりき。是を以て、朕、當に神しき謀を助け奉りて、任那を復興てむとおもふ。今百濟に在る、火葦北国造阿利斯登が子達率日羅、賢しくして勇あり。故、朕、其の人と相計らむと欲ふ」とのたまふ。

⑯『日本書紀』敏達12年（583）是歳条

日羅、…「檜前宮御寓天皇（宣化）の世に、我が君大伴金村大連、国家の奉為に、海表に使しし、火葦北国造刑部鞍部阿利斯登の子、臣、達率日羅、天皇の召すと聞きたまへて、恐り畏みて来朝り」とまうす。…是に日羅、桑市村より、難波の館に遷る。徳爾等、昼夜相計りて、殺さむとす。…遂に十二月の晦に、光失ふを候ひて殺しつ。日羅、更に蘇生りて曰はく、「此は是、我が駆使奴等せる所なり。新羅には非ず」といふ。…乃ち使を葦北に遣して、悉に日羅の眷属を召して、徳爾等を賜ひて、情の任に決罪しむ。是の時に、葦北君等、受りて弥壳嶋に投つ。…日羅を以て、葦北に移し葬る。…

東アジアの国際関係の中で活躍した肥（火）国の人間がいたのであるが、『日本書紀』欽明17年（556）正月条には、百濟王子惠を本国に護送するために阿倍臣・佐伯連・播磨直らと筑紫の「舟師」（ふないくさ、水軍）を派遣したことに関連して、次の記載がみられ、火君関係者が軍事的にも活躍した様子がうかがえる。

⑯『日本書紀』欽明17年（556）正月条

別に筑紫火君〔百濟本記に云はく、筑紫君の児、火中君の弟なりといふ。〕を遣して、勇士1000を率て、

衛りて彌豆〔彌豆は津の名なり。〕に送らしむ。

火（肥）君は倭国と朝鮮半島との交流の中で活躍する水軍の軍事力を率いる地方豪族であったのである。

また、肥君としてよく知られる人物が、正倉院文書の大宝2年（702）「筑前国嶋郡川辺里戸籍」に記載された筑前国嶋（志麻）郡の郡司であった肥君猪手である。肥君猪手は、嶋郡の大領であり、「戸主追正八位上勲十等肥君猪手」とみえ、戸口を124人（不課は109人で、内訳には女45人・奴婢37人がふくまれる）も抱える有力な戸の戸主であった。肥君猪手は嶋郡の郡司の大領として大きな勢力を在地で振るっていたことが推定できる。筑前国嶋郡は、いうまでもなく北九州の海に面して大陸・半島に向かって開かれた玄関の位置にあたる地であり、その地にも肥後国の方豪族の一員が進出して展開した様相が見られるのである。さらにすでに述べたように、この肥君猪手が郡司であった筑前国志麻郡において、志麻郷（糸島郡志摩町）稻留付近に、『日本書紀』に「稻積城」（史料⑧）と記される、7世紀代の古代朝鮮式山城と推定される対外防備の城が営まれていたのである。

朝鮮半島に向けての対外関係だけでなく、南方の薩摩国の方にも肥君の勢力が進出している様子は、正倉院文書の中の天平8年（736）度薩摩国正税帳の記載に見ることができる。すなわち、薩摩国出水郡の郡司の大領として外正六位下勲七等の肥君という人物（名前は未詳）の存在が知られ、また、薩摩郡にも郡司主帳として外少初位上勲十二等の肥君広龍という人物が居たことが知られるのである。律令国家勢力の南九州進出に際して、肥君氏族が積極的に協力して薩摩の現地にもその勢力を展開した経緯がうかがえるのである。

菊池川流域の古墳群は、江田船山古墳（熊本県和水町）だけでなく、装飾古墳が名高い有力な古墳群を形成している。その背景には、菊池川流域の肥沃な生産地が開けているといえよう。鞠智城の立地は、有明海に直接面するわけではなく、やや奥まっているともみられるが、菊池川流域の有力な生産地を背後から守るという面では、例えば瀬戸内海からやや離れて吉備の有力生産地を背後から守る性格をもつ古代朝鮮式山城の鬼城山（岡山県総社市）と似ているといえるのではないだろうか。また、古代には、海面が現在よりも菊池川沿いの内陸部奥深くまで及んでいたと考えられる。この菊池川水系の水上交通との関係も、大規模な鞠智城築城への資材運搬や稻穀の倉庫群への運搬などにあたって、必ずや利用されたことであろう。また、西海道の陸上交通との関係では、筑前・筑後から肥後を通じて薩摩へと向かう南北ルートと、有明海側から豊後へ向けて走る東西ルートとの交点となる要衝の地に鞠智城が位置しているといえるように思う。

白村江の敗戦後の国際的緊張のもとで対外的な防備の機能を鞠智城が果たしたことは当然であろうが、一方南方の対隼人政策との関係で鞠智城が機能を発揮することも、あり得ることと考える。大宝2年（702）9月には薩摩の隼人を攻撃する軍士に勲位が与えられているように、8世紀初めに南九州においては対隼人の軍事行動が展開していたし、日本律令国家側でその戦いを主担したのは、鞠智城をも管下に置く大宰帥であったろう。薩摩における対隼人戦に兵士・軍糧を送り込む際に、上述した大宰府から薩摩国に至る交通ルート上の鞠智城が、大宰府の前進基地としての機能を果たすこと、十分推定される。

②『続日本紀』大宝2年（702）9月戊寅条

薩摩の隼人を討つ軍士に勲を授くること各差あり。

8世紀初期に、筑後国と肥後国が西海道の中でも結びつきのある地域を構成したことは、国司としての治績が律令国家により賞賛されたことで知られる道君首名という貴族が、筑後国司として赴任しながら同時に肥後国司を兼任したことにもうかがえる。『続日本紀』によれば、道君首名は、遣新羅大使として新羅に派遣されて外交業務を果たして帰国したのち、すぐに筑後守に任じられ、さらに肥後守をも兼務している。新羅との外交を担当したばかりの貴族が筑後・肥後の国司となっていることは、両国の対外関係における位置づけと関連して興味深い。

②『続日本紀』和銅6年（713）8月辛丑・丁巳条

從五位下道公首名、新羅より至る。（遣新羅大使）

從五位下道君首名を筑後守。

なお、道君首名は、筑後守兼肥後守として在任中に両国で「治績」をあげ、肥後の味生池を勧農のために築いたことでも知られる。

②道君首名卒伝（『続日本紀』養老2年〔718〕4月乙亥条）

筑後守正五位下道君首名卒しぬ。首名少くして律令を治め、吏職に曉らかに習へり。和銅の末に出でて筑後守となり、肥後国を兼ね治めき。人に生業を勧めて制条を為り、耕営を教ふ。頃畝に菓菜を樹ゑ、下、鶏豚に及るまで、皆章程有りて曲さに事宜を尽せり。既にして時案行して、如し教へに遵はぬ者有らば隨に勘当を加へり。始めは老少竊かに怨み罵れり。その実を收るるに及びて悦び服はぬこと莫し。一両年の間に、国中化けり。また、陂・池を興し築きて、灌漑を広む。肥後の味生池と、筑後の往々の陂・池とは皆是なり。是に由りて、人その利を蒙りて、今に温給するは皆、首名が力なり。故、吏の事を言ふ者は、咸く称の首とす。卒するに及びて百姓これを祠る。

4. 鞠智城の経営と機能

鞠智城は、白村江の敗戦直後の7世紀後期に、倭の大王権力によって營まれた古代朝鮮式山城の一つであるといえよう。築城を指導した百濟の亡命貴族の名前が『日本書紀』に記される大野城・基肄城とは異なり、百濟貴族との関係を物語る史料などは無いが、築城にあたって百濟系技術が導入されたであろうことは、考古学的な発掘調査成果によって検証される必要があろう。なお、鞠智城内の貯木用の池の汀から出土した7世紀代の百濟系の小金銅仏は、創建期における百濟との交流の一端を物語ってくれるかもしれない。

造営主体については、古代朝鮮式山城の規模・構造からみて、やはり大野城・基肄城と同じく倭の大王権力の命令下に同時期に築城されたとみられる。その後は、直接には大宰府の管理下に置かれ、大宰府の管隸下に位置づけられる「鞠智城司」のような官司が置かれて経営されたのであろう。ただし、立地する肥後国司とも密接な関係をもったことも、疑いない。大宰府麾下ということでは、鞠智城の守備要員として防人の一部が派遣される可能性も考え得るが、肥後国司の管轄の下で、国司のもとで肥後の軍団兵士がその守りにつくことは充分に考えられる。鞠智城の維持・管理も、肥後国との協力がなくてはならないものといえる。三関（伊勢国鈴鹿関・美濃国不破関・越前国愛發関）の関司に当國の国司の一員が派遣されているように、肥後国司の一員が「鞠智城司」の任を果たすことが考えられる。さらに、所在する菊池郡の協力・負担も、鞠智城の維持・管理のためには必須であったろう。鞠智城のように大規模で国家的な城の場合、大宰府・肥後国・菊池郡といった諸組織のいずれとも重層的な関係をもちつつ維持されねばならなかつたと考えてよからう。

鞠智城跡の出土木簡として文面が知られる木簡は、貯水池・貯木場から出土した次の米の貢進物荷札木簡である。

③鞠智城跡出土木簡

秦人忍□〔米力〕五斗

長134mm×幅26mm×厚5mm

これは、秦人忍という人物が負担した五斗一俵の米俵に付された荷札木簡であり、国名・郡名・郷名を省略した記載形式からは、鞠智城が所在する肥後国菊池郡に属する人物からの貢進とみられる。鞠智城の造営や軍事に携わる人々に支給される食料としての米が、最終的に消費される場において、米俵が解かれる際に荷札木簡がはずされ、廃棄されたものと考えられる。これにより、鞠智城に運び込まれ貯積されたこの米の場合、大宰府規模や肥後国規模ではなく、地元の菊池郡規模の範囲で徵収されたものであることが推測されるのである。秦人という渡来系の人物が菊池郡の在地社会に居たことも、興味深い。鞠智城の近くには、秦

氏の氏社として著名な平安京近郊（京都市）の松尾大社とも通じる松尾神社が鎮座していることも合わせ考えることができる。

結局、鞠智城の造営は中央の大王権力の命で行われたが、その後の経営の主体としては、大宰府が決定権をもちつつ、肥後国府や菊池郡家などの協力のもとに存在したものと思われる。

7世紀後期に九州から瀬戸内・近畿にかけて営まれた古代朝鮮式山城の機能としては、軍事・斥候の機能があることはもちろん、稻穀貯蔵の機能や、官司としての機能などがある。これらの軍事的機能・財政的機能・行政的機能に対応する施設として、城郭防御施設（城壁・門・櫓など）・烽・物見台・兵員宿泊施設・武器庫など、稻穀貯蔵のための倉庫群、そして政庁・実務官衙・厨・井戸などの施設が設けられる必要がある。鞠智城の果たすべき機能には、古代の地方官衙がそうであるように、こうした多様な機能が複合的に絡み合って存在していたと考えてよいだろう。

7世紀後期の白村江の敗戦直後の緊張した国際関係のもとでは、当然軍事的機能が最大限重視されたであろう。ただし、百濟滅亡（660年）・高句麗滅亡（668年）の後は、唐の遠征軍と新羅とが半島の支配権をめぐって争う状況となり、結局676年に新羅は鴨緑江以南の半島の支配権を確立して統一新羅を実現していった。この過程では、唐・新羅連合軍が日本列島に侵攻してくるような緊張した情勢は早くから後退し、新羅は唐との対抗上から親密な使節を倭に対して派遣してくるようになる。倭も、高句麗滅亡直後の遣使以降、遣唐使を30年ほど派遣しなくなる一方で、新羅との間にはしばしば使節の往来が行われている。こうして唐・新羅に対する直接の軍事的危機が去っていくと、8世紀の古代朝鮮式山城の機能としては、南九州の隼人勢力との軍事的衝突の方がクローズアップしたり、軍事的機能よりも倉庫群による稻穀貯積機能の方が目立つことになる。大野城や基肄城で確認されている大規模な礎石倉庫群や焼米の存在が示すように、籠城するための大量の稻穀が貯積されている古代朝鮮式山城の場合、軍事的必要性が薄まつたり稻穀の保存期限が迫ってくるなどの場合に、その大量の貯穀を国家が如何に有効活用するのかが課題となってくる。

大宰府史跡の都府樓南前の不丁地区の官衙から出土した木簡の中には、基肄城に貯積された稻穀を筑前・筑後・肥国（肥前・肥後）などの諸国に班給するために、大宰府官人の大監が派遣されたことを記した文書木簡が見つかっている。

④大宰府史跡不丁地区出土木簡

為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稻穀隨 大監正六位上田中朝〔

この木簡により、基肄城の倉庫群に納められた大量の稻穀は、筑前国・肥前国ではなく大宰府の直接管理下にあったこと、飢饉・不作の際や保存期限到来の際などの必要に応じて、そこに蓄積された大量の稻穀が西海道諸国に班給されることがあったことがわかる。この時、基肄城の稻穀が筑前・筑後だけでなく肥国にも支給されていることは、やはり古代朝鮮式山城が大宰府の管理下で西海道全体のための機能を果たす施設であるということを示している。基肄城の稻穀がこの時筑前・筑後・肥前・肥後等の諸国に支給された経緯は未詳だが、おそらく鞠智城にも存在した多くの倉庫群に貯積された稻穀も、同様に扱われることがあり得たはずである。

9世紀になると、鞠智城については兵庫や倉舎の異変についての記事が六国史に特記されるようになる。

⑤『日本文德天皇実録』天安2年（858）閏2月甲寅条・丁巳条

肥後国言、菊池城院兵庫鼓、自鳴。

又鳴。

⑥『日本文德天皇実録』天安2年（858）6月己酉条

大宰府言、…又肥後国菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。

②『日本三代実録』貞觀 17 年（875）6 月 20 日条

大宰府言、大鳥二集肥後國玉名郡倉上、向西鳴。群鳥数百、噬抜菊池郡倉舍草。

③『日本三代実録』元慶 3 年（879）3 月 16 日条

又肥後國菊池郡城院兵庫戸自鳴。

9 世紀後半にも、鞠智城が中央政府への報告公文書に「菊池城院」「菊池郡城院」と表記され、兵庫・不動倉や草葺屋根をもつ倉舎が維持されていたことが知られる。「城院」の記載からは、外郭土塁に囲まれた城としての機能が存続していたことを示している。天安 2 年（858）の国有の稻穀収納倉庫である不動倉 11 室の火災は、鞠智城跡の礎石建ちの倉庫建物の周辺からの炭化米の出土とも関係しよう。8 世紀後期から 9 世紀にかけて諸国で起きた正倉院の火災は、はじめ「神火」と称されて天災と考えられたが、次第に地方社会における富豪層の勃興に起因する地方豪族たちの抗争を背景とした人災であると認識されていった。肥後國菊池郡の地も、こうした全国的な社会的変動の展開の枠の中に位置したことがうかがえよう。鞠智城の機能としては、鞠智城Ⅳ期に時期区分される 8 世紀第 4 四半期から 9 世紀第 3 四半期までの遺跡の様子は、礎石建物が大型化して建ち並んでおり、この時期も充実した稻穀貯積の財政的機能を果たしていたことがうかがえる。

こうした財政的機能と同時に、軍事指揮用の鼓などの武器を蓄積した兵庫も存続しており、軍事的機能も継続していたことが知られる。ただし、兵庫の鼓や扉がひとりでに鳴ったり、多数の鳥が倉庫や建物の草葺屋根の草を咬み抜いてしまったことなどの異変は、この時代には軍事的な兵乱が起る前兆としての異変の報告であった。この 9 世紀代の軍事的緊張としては、新羅の海賊が北部九州などにしばしば進出してきて、国家的な対外的緊張状態にあったことを考えなくてはならない。すなわち、これらの鞠智城での異変記事は、鞠智城の対外的な軍事的機能と結びつけて理解することができると思われる。

鞠智城の機能については、対外的な危機に際して築城された軍事的機能にはじまるが、その対象を隼人世界に向けた軍事的機能も考えられ、稻穀貯積機能にみられる大宰府管内・肥後国内における財政的機能も発揮され、また 9 世紀には新羅との対外的緊張における軍事的機能もうかがえる。時代によって機能の重点を移動しながら、軍事的・財政的・行政的にわたる多様な機能を果たしつつ、国家的な性格をもつ古代山城として存続したといえよう。その経営については、中央政府の命で築城されたのち、大宰府・肥後国が関与して管理がおこなわれ、地元の菊池郡もそれに協力するという重層的な体制で維持されたものと思われる。

鞠智城Ⅴ期である 9 世紀第 4 四半期から 10 世紀第 3 四半期にかけては、建物の減少など機能低下しつつも倉庫の維持が続いたが、最終的に 10 世紀第 3 四半期頃には鞠智城の機能は終焉を迎える。この時期は、全国的に地方官衙遺跡である国府（国衙）や郡家（郡衙）の遺跡が役割を閉じる時期であり、国司が国内行政を委任される受領請負制にもとづく受領制の展開などの社会的な変動の中で、鞠智城の歴史展開も位置づけなくてはならないのである。

5. 鞠智城跡発掘調査の成果と課題

これまで熊本県教育委員会によって進められてきた鞠智城跡の地道な発掘調査は、多くの成果を挙げてきている⁽⁶⁾。まず、古代朝鮮式山城とされる鞠智城そのものの構造が明らかになってきた。その中では、所により二重になる石垣・土塁の防衛線とその構築技法、軸摺穴をもつ大きな門礎石を特徴とした門や、谷部に水門・石垣等をもち「折れ」をもつ土塁の構造、石垣・土塁の防衛線に囲まれた中の、八角形建物・倉庫群・兵舎推定建物・政庁推定地区などの建物群、日本の古代朝鮮式山城では他に例をみない谷部をせき止めた貯水池・貯木場など、多くの遺構が注目される。また、木簡、百濟系の小金銅仏や百濟系の瓦などの多様な遺物も、見逃すことはできない。とくに最近出土した百濟系小金銅仏の存在は、百濟と鞠智城の関係や、仏教

受容のあり方を考える上で、重要な発見であった。

このうち、八角形建物（鼓楼説がある）や貯水池・貯木場については、韓国河南市にある二聖山城における八角形建物・多角形建物や石組み護岸をもつ方形の貯水池の存在との共通性が指摘される。

こうして発掘調査によって多くのことが明らかになってきた鞠智城ではあるが、まだ追究されるべき様々な検討課題が控えているといってよいであろう。それを整理すると、築城の開始年代・改修年代、石垣・土塁・門・建造物などの技術的特徴と性格、各時期別の建物配置の把握、他の古代朝鮮式山城との築城技術の比較－類似性・独自性の解明－、百濟の築城技術との関係、そして周辺遺跡群などや烽・交通路の連絡網とのつながりの確認などが挙げられよう。遺構の面では、門・石垣・土塁の構造、倉庫群とその掘立柱建物から礎石建物への変遷、八角形建物の性格、礎石建物の周囲に掘立柱の廂が付く建物の性格などが挙げられる。出土遺物の面では、菩薩立像の小金銅仏の位置づけ、出土瓦の位置づけや技術背景・生産地、土器の変遷と時期別の出土量変化の意味など。さらに造営・経営をめぐる課題では、築城年代は663年の白村江の敗戦の頃で良いのか、はじめの改修年代は『続日本紀』に修築記事のみえる698年で良いのか、その後礎石建物で瓦葺きの建物となる契機は何か、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期がもっとも大量の土器が出土しているのに対してそれ以降の8世紀から9世紀前半にかけての土器の遺物量が少ないと歴史的理 解、礎石建物化する時代変遷の時期と歴史的意味、9世紀にはどのような機能を果たしたのか、鞠智城の衰頽・廃絶の経緯・契機は何か、などの問題について、さらに追求されて豊かな歴史像に結びつくことが期待される。

また、東アジアの中における鞠智城の位置づけも、大きな課題である。百濟の技術との比較については、すでに水城や大野城その他の史跡でも敷粗朶工法・版築工法・柱の埋め殺し工法などの技法・技術が朝鮮半島系の技術として検討されている。日本列島の古代朝鮮式山城との比較検討はもちろん、八角形建物や貯水池が共通する韓国の二聖山城や、八角形建物が共通する中国の高句麗丸都山城など東アジア山城にみられる技術とのさらなる国際的比較研究が望まれる。建築史的な課題として、2棟並ぶ八角形建物の機能・性格の意味、礎石建物の周りに掘立柱の廂が取り巻く建物構造の意味、門の構造の歴史的位置づけなども検討が必要となる。そのほか、立地の問題については、古代の西海道、肥後・豊後連絡路との関係や菊池川の水運との関係などが深く関係してこよう。海岸線を離れて菊池川をさかのぼった地に営まれたことをどう理解するのか、古墳時代の古墳群の分布や、古代における地方官衙である郡家（郡衙）や寺院の配置との関係、古代官道や条里制水田との関係なども、追究が望まれる。さらに、造営技術と造営・経営主体の問題がある。技術的に百濟の技術がどのようにどの程度導入されているのか、考古学的に解明され裏付けられることが望まれる。また律令政府・大宰府・肥後国・菊池郡の各レベルと鞠智城との関係も、遺構・遺物の面から探るべきであろう。

こうして、鞠智城の果たした機能や変遷などの歴史的性格を明らかにすることを通して、7世紀から9世紀にかけての東アジアの国際関係下における日本列島の古代史に有意義な提議が行われることになると思われる。

6. おわりに

熊本県教育委員会が長年にわたって行ってきた鞠智城跡の発掘調査は、多くの成果をもたらしてくれているが、調査範囲は広大な史跡の一部に止まっており、発掘調査は今後も史跡整備と関連してまだ継続して続けられようとしている。ようやくこれまでの各年度の成果を取りまとめた総合的な報告書が刊行されたが、そこでの考古学的知見の事実の基礎の上に、具体的な鞠智城の構造・変遷の意味や、鞠智城の歴史的意義の時代的展開の全貌を明らかにする調査・研究の学問的営みは、これからさらに求められるものと思う。鞠智城自身の構造や遺構の時期的変遷についての検討と、その歴史的位置づけの追求は、まだ学際的で多角的な

調査・研究に期待されるところが大きいし、朝鮮半島や日本各地の他の古代朝鮮式山城との構造・技術などの国際的比較研究や、肥後・菊池川流域に展開する古代遺跡群の中における鞠智城の位置づけの解明など、今後さらに豊かな鞠智城像が明らかになる可能性が指摘できるだろう。その過程で、鞠智城の解明は、日本や東アジアにおける古代山城の歴史把握に大きな新しい寄与をもたらすことが期待できよう。

もちろん、鞠智城がもつ歴史的意義の重要性については、すでに国指定史跡に指定されている上に、これまでに一定の史跡整備が進められており、温故創生館のような調査・ガイダンス施設もすでに機能して、多くの人々が訪れる史跡公園となっていることからも、周知されつつあるといえよう。ただし、個々の遺構や遺物に止まらない鞠智城の多面的な歴史的意義が総合的に明らかにされ、その成果が学界や国民の前に広く提示される段階に達するまでには、さらに一段の努力が必要かと思われる。今後の課題として、鞠智城が列島そして東アジアの古代において果たした歴史的意義の解明に結びつく調査・研究の進展と、古代山城をめぐる学術的検討のさらなる深化とともに、その成果が多方面に発信されることが求められているのではないだろうか。

〈註〉

- (1) 石母田 正『日本の古代国家』岩波書店 1971年
- (2) 『日本書紀』各条
- (3) 岸 俊男『日本古代政治史研究』塙書房 1966年
- (4) 佐藤 信「古代国家と烽」『出土史料の古代史』東京大学出版会 2002年
- (5) 小田富士雄編『石人石馬』学生社 1985年
小田富士雄編『古代を考える 磐井の乱』吉川弘文館 1991年
- (6) 篠川 賢『大王と地方豪族』(日本史リブレット) 山川出版社 2001年
- (6) 熊本県教育委員会『鞠智城跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告書第276集 2012年

〈引用・参考文献〉

- 石母田 正『日本の古代国家』岩波書店 1971年
井上辰雄『火の国』学生社 1970年
沖森卓也・佐藤 信・矢嶋 泉『肥前国風土記・豊後国風土記』山川出版社 2008年
小田富士雄編『石人石馬』学生社 1985年
小田富士雄編『古代を考える 磐井の乱』吉川弘文館 1991年
鞠智城跡国史跡指定記念シンポジウム報告書『古代山城鞠智城を考える』温故創生館 2005年
岸 俊男『日本古代政治史研究』塙書房 1966年
熊本県教育委員会『グラフよみがえる鞠智城』 1999年
熊本県・熊本県教育委員会『鞠智城東京シンポジウム 古代山城鞠智城を考える—国指定史跡「鞠智城跡」の歴史的意義と課題—』 2009年
熊本県教育委員会『鞠智城跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告書第276集 2012年
熊本県教育委員会『古代山城鞠智城を考えるⅡ 成果報告 東京シンポジウム2010』 2012年
熊本県教育委員会『鞠智城と古代社会』第1号 平成24年度鞠智城「特別研究」論文集 2013年
笛山晴生監修『古代山城鞠智城を考える 2009年東京シンポジウムの記録』山川出版社 2010年
佐藤 信『古代の遺跡と文字資料』名著刊行会 1999年
佐藤 信『出土史料の古代史』東京大学出版会 2002年

- 佐藤 信『律令国家と天平文化』(日本の時代史4) 吉川弘文館 2002年
- 佐藤 信『日本の古代』放送大学教育振興会 2005年
- 佐藤 信「古代史からみた鞠智城」(筮山晴生監修『古代山城鞠智城を考える 2009年東京シンポジウムの記録』山川出版社 2010年)
- 佐藤 信「古代鞠智城と東アジア」(『古代山城鞠智城を考えるⅡ 成果報告 東京シンポジウム2010』熊本県教育委員会)
- 篠川 賢『大王と地方豪族』(日本史リブレット) 山川出版社 2001年
- 白石太一郎監修 玉名歴史研究会編『東アジアと江田船山古墳』雄山閣 2002年